

書評『共に育つーハート・オブ・ゴールドー一〇年の歩み』／諸岡了介

この冊子には、一九九八年に発足した岡山県発信のスポーツ NGO、「ハート・オブ・ゴールド (HG)」の一〇年間の営みがつまんでいる。HG は「スポーツによる社会開発・社会貢献」を謳って、カンボジアを主要なフィールドにした国際協力事業を進めてきた。その内容は多岐にわたっており、例えば、スポーツ育成、障害者自立支援、義肢・義足支援、エイズ孤児救済、里親事業といった活動が紹介されている。

一見、スポーツと社会貢献とは関係がなさそうに見える。いったいどうして、この二つが結びつくのだろうか。

よく、「マラソンのように苦しいことを、なぜわざわざするんだろう」という言い方を聞く。だが、ひたすら辛いだけなら、誰も走ったりしないはずだ。進んでランナーが走るのは、ときには苦しくも感じるプロセスが、実は大きな喜びにつながっているという手ごたえをつかんでいるからに違いない。

一つ一つのプロセスが喜びにつながっているという確かな実感をもたらすとき、スポーツは社会貢献活動に対しても大きな力となる。この本を読み、そのことに気づかされた。

実際、ページをめくって真っ先に感じたことは、「みんな楽しそうだ！」という印象だった。それは、「義務としての社会貢献」というイメージとも異なっている。何かを「してあげる」「してもらう」関係ではなく、みんなでともに楽しさを分かちあう光景には、HG の活動にスポーツの精神が生きていることが感じられる。

HG 代表理事の有森裕子さんは、「できる人が、できることを、できる限り」と言う。「できる限り」というフレーズを、「義務」の意味に取ってしまうと、重い負担のように感じてしまうかもしれない。しかし、一〇年もの間、息の長い活動と続けてきた有森さんや HG の方々の姿が伝えているのは、むしろ「できる限り」やることこそ、ものごとを楽しく喜び多いものにする鍵なのだというメッセージと思われた。